

2021/12/14

一九七八年三月八日の講義
司牧制から政治的統治へ

担当：K 原

1) 魂の司牧制から人間たちの政治的統治へ (pp.283-5)

- これまで人口と国家について「統治性」という概念を用いてその問題を明らかにしようとしてきた (1978年2月8日の講義)。
- 「人間たちを統治する」という考え方は、東方においてみられ、さらにそれがキリスト教において制度化されてきたことを説明 (1978年2月8日の講義)

今回は、キリスト教における「魂の司牧制」から、人間たちの「政治的統治」に話題を移す。この移行を、操行原則に対する抵抗・反乱・蜂起などの大きな一般的風土のなかに置き直す必要があるとフーコーは指摘している (p.283)。

→今回の講義では、これまで絶対的な神による統治・支配が大前提だった世界や、そこでの統治のあり方は、抵抗・反乱・蜂起によってどのように変容したのか？誰が何をもって統治することが許される (正当化される) ようになったのか？という話かな？

2) 16世紀における司牧の危機 (pp.285-6)

16世紀 (宗教改革の時代) : 司牧の消滅は見られず。また、司牧的諸機能が教会から国家へと大々的・包括的に転移されるということさえも見られず

16世紀に見られたのは…

1. 宗教的司牧の強化 (pp.285-6)

司牧が個人の物質的生活にこれまで以上に関与してくるようになった

2. 教会の権威の外でも人間たちに対する操導の発展が見られる (pp.286-8)

3) 公私両面においてなされる宗教的司牧の強化、操行に関する問いの増加 (pp.285-7)

- 私的領域においては…どのように自己を操導すべき？どのように子どもを、家族を操導すべき？自分に対してどのような規則を与えるべき？
→操行に関する問題が強化され、中世において消滅していたヘレニズム時代の哲学が再登場してくる。ポイントは、とにかく宗教や教会に特有のものではない形式をとったこと。
- 公的領域 (のちの政治的領域) においては…主権者には、どこまでの主権があるのか？どこまで新たな任務をやっていいのか？という点が問題になってくる。

16世紀とともに操行の時代、指導の時代、統治の時代へと入る。ここで、子どもの教育という問題が他の諸問題よりも強烈なものとなった。→子どもの教育についてはあまり深く読み込めませんでした。

主権的権力を行使するものは、人間たちの統治という新たな特有の任務をどの程度まで引き受けるべきなのか？

- ①（合理性に関する問題）どのような合理性に基づいて主権の枠内で人間たちを統治できるのか？
- ②（領域・対象に関する問題）人間たちの統治は、主権者（政治的主権者）の任務・権限とされるが、何を特有の対象とするべきか？

今回の講義では、フーコーは①の問いについて応えている。つまり、「司牧的理性」とは違う「国家理性」とはどのようなものなのか？

4) 主権の行使に固有な国家理性、トマス・アクィナスとの比較 (pp.288-90)

主権者の統治の正当化

(13世紀頃) トマス・アクィナスの「統治の類比」モデル

- ① 神との類比：王（主権者）が統治できるのは、それが神が自然を統治したのと同じように自分の国家・ポリス・地方を統治しているからだ。
- ② 王と生体の生命力との類比（連続性）：自然には何らかの指導力である生命力があり、それが生きた身体を構成する諸要素を維持している。同じように王国において各個人は自分自身の善（人間の本質的特徴）へ向かうことで保たれている。だから、王国にも生体における生命力（指導的な力）＝法がなければならない。
- ③ 牧者や一家の父との類比・連続性：人間が最終的に向かうのは永遠の至福・神の享樂である。これを人の群れに獲得させることができる方法に従い、彼らに公共善を手に入れさせなければならない。そうであるならば、王の機能は牧者たちの羊に対して果たす機能とも、一家の父が家族に対して果たす機能とも変わらない。

主権者はこの一大連続体（宇宙論的神学的な連続体）の名において統治を認められる（＝正当化される）

→この大連続体が、16世紀に破られることになる (p.291)

5) 宇宙論的神学的な連続体の断絶 (pp.291-3)

16世紀末から17世紀末にかけて、主権の行使とは異なる特有性をもつ統治の形式が探し求められ、定義づけられるようになる。

コペルニクスやケプラーの天文学、ガリレイの物理学などの言説実践・科学実践が誕生したことにより、神は一般的諸法則（普遍的なもの・分析されるもの）によってのみ世界を

支配しているということが示された。神は司牧的なやり方で世界を統治していない。神が主権的に君臨するのは、諸原則を通じてである (p.291)。

これまで考えられていた「世界を司牧的に統治する」とはどういうことだったのか？
世界が司牧的に統治されていたとするならば…

- ① 世界が救済のエコノミーに服従しており、世界は人が神によって救済されるために作られているということになる＝別の世界へ移行するために存在している世界は人間が救済を得るべき諸原因からなる世界ということになる。
- ② 神が存在に対し、神自身の意志をしるし・奇蹟・驚異・怪物性により表明するように強調した世界ということになる。
- ③ 真理の一大エコノミーがある世界ということになる。一方では教えられる真理で、もう一方では隠される・引き出される真理。司牧的に統治される世界においては、教えの形式がいくつかあったということになる。＝暗号化されるべき暗号に充ちた世界であった（具体的にどうということなのか、救済のエコノミーとの違いなど、あまりよくわからなかった）

これらの全面的に目的論的な世界、人間中心化された世界、奇蹟・驚異・しるしに充ちた世界、類比と暗号に充ちた世界こそが、神の司牧的統治の明白な形式をなすものだったが、これがフーコーによれば 1580-1650 年の間に消滅した。

それでは、主権者を固有たらしめているのはなんなのか？→16 世紀末に新しい統治の水準や形式のもつ特有性が出現

6) 統治術に関する問いー歴史における知解可能性に関する指摘 (pp.293-7)

主権者を主権者たらしめるのは、主権に対する補足物や、司牧に対する差分・他性を求められるところ。それが、神が自然に対して、牧者が羊たちに対して、そして一家の父が子どもに対しておこなうのとは違うことを求められるということである。

新しいモデルを自分で探さなければならないこの何かが統治術である。これが見つかれば、主権でも司牧でもないこの作用をどのような合理性にしたがい正当化して行うことができるかわかる (p.294 くらい)。

そうなると、次に問題となってくるのは「統治術とは何か？」 (p.294)

これまで一大連続体 (神、自然、父) によって統治が正当化されてきたが、そうではなく統治のテーマから自然が断たれる水準がある。今やあるのは理性の君臨のみを容認する自然である。それが「自然の原則」であり、他方には人間に対し行使される「国家理性」がある。※ボテロ「国家とは人民に対する堅固な支配である」 (p.294) : 国家は領土によって定義されない。

→自然と国家が近代西洋の人間に与えられているさまざまな知や技術の2大座標としてついに構成され、分離される

しかし、この2つが分離される前に1つであったもの（唯一の源泉）を示すことは自分（フーコー）にはできないが、しかし、多様なプロセスから出発することはできるのではないか？そうすると、どのような現象があったかを示すことで、そのプロセスの知解可能性を打ち立てることが問題となる。歴史の知解可能性は、諸効果の構成とでも呼べるものに存するのかもしれない。

→この歴史の知解可能性がよくわかりませんでした。歴史から帰納的に自然・国家というものを理解するというのではなく？

7) 国家理性（1）新しいもの、スキャンダルの対象（pp.297-300）

国家理性という概念への反応（3つの立場）

- 1つの発明として知覚された。物体の落下に関する法則と同じような際立った、突然のものともみなされた。「何か新しいもの」として知覚された。
- 一方で、「いやこれは前から存在した」（偽物の新製品）という人もいた。古代にもすでに問題になっていた。
- 反対に「これはラディカルな新製品だ」という人もいた（ヘムニッツ）。たしかに国家理性が国家が機能するメカニズム自体のことだとするならば以前から存在していた。しかし、国家理性を探知し分析するには、まったく新しい知的道具（＝科学、自然の諸原則かな）が必要だった。だから見えなかったものが見えるようになったのだ。

→国家理性はスキャンダルを引き起こす「悪魔の理性だ」

8) 国家理性をめぐる論争の3つの焦点。マキャヴェッリ、「政治家」、「国家」（pp.300-7）

政治家にとっての焦点は国家という神である（p.300）。これこそが政治家の唯一の神である。

国家理性をめぐる論争の3つの焦点…

- マキャヴェッリ：16-17世紀に人々が探し求めていた統治術は、マキャヴェッリにはみつからない（議論の中心にはいる）。彼の言ったことを通じて統治術とは何かを探し求められた。マキャヴェッリが救済しようとしているのは国家ではなく領国（領土や人口に対する君主の権力関係）である。また、彼の諸原則を使うことは統治術へ乗らないばかりか、神なしで済ませ、特有な形式の統治を探し求めようとすると、君主のきまぐれにたどり着くばかりでなく、さらに人間たちの上にかなる形式の義務も創設することができないという不可能世にたどり着く。もはや神がないのであれば義

務もない。神が存在しないのであれば、すべてが許される。という議論にも通じてしまう。

- 政治家：政治家とは一つの宗派である。16-17世紀の西洋にまず登場したのは領域としての政治ではなく、さまざまな対象の集合としての政治でもなく、職業としての政治でさえもなく、政治家であった。そこで登場したのは、主権の行使とは異なる統治の特有性を経て、思考し、プログラムする何らかのやりかたであった。＝統治の合理性の形式をその形式自体のために思考したのが政治家である（p.304）。
- 国家：次回乞うご期待。ただ、改めて捉えなければならないのは、国家が人間たちの実践と思考の領域のなかに入ったということである（すでに国家を構成するもの、例えば税制や司法はすでにずっと前から存在していた）。

多様でそれぞれ非常に異なっているさまざまなプロセスから出発し、少しずつ形成されていき、少しずつ凝固して効果を形成した権力関係・統治実践が、実はまさに国家が構成される出発点なのではないか？→市民社会が16世紀以来、国家と呼ばれるあの脆くもあり執拗でもある何者かを設置したのはどのようにしてか？（p.306）